

芸術の認知的価値とは何か

—— ビアズリーの美的厚生論からの再考

東京大学 汪 瑾如

本発表は、芸術は認知的価値を持つという美的認知主義の認知的主張を明らかにすることによって、芸術の認知的価値はその美的価値を部分的に決定するという美的認知主義の美的主張との関係を構築する試みである。

美的認知主義 (aesthetic cognitivism) は、芸術作品の認知的価値 (認知的主張) は、作品の美的価値を部分的に決定する (美的主張) ということである。では、芸術の認知的価値とは何だろうか。美的認知主義者は、芸術を「世界認識の方式の一つ」と捉え、「認知的価値」を「知識を教える」ととす。それに基づき、新認知主義者は「知識」の代わりに「理解」という言葉を用い、知識よりも広い認知的達成や認識論における他の側面を網羅する。

一方、美的認知主義は、芸術的価値の理論として、芸術をめぐる行動の理由を与え、特に、芸術教育の推進の理由を、他の理論よりもうまく説明する。多くの美的認知主義者は、芸術、特にフィクション作品には、人の道徳的理解を向上させる機能があると信じている。道徳教育のためには、芸術の認知的機能が重視されるべきである。

教育のための認知的機能を持つ芸術や他の美的価値のあるものは、分配的正義の問題に直面している。ビアズリー (Monroe Beardsley, 1915-1985) は、「美的厚生」と「美的正義」という概念を提示し、教育機関は、美的厚生と正義を促進する公共政策を実行する事業において、中心的な役割を果たすと主張している。また、ビアズリーは、教育の三つの目標、すなわち認知的発達、道徳的発達、美的発達を提唱しており、教育は美的機会と美的能力を促進する役割があると主張している。この観点から、芸術の認知的機能は道徳的発達だけでなく、美的発達にも貢献するのである。

本発表は、ビアズリーの美的厚生論を踏まえ、認知的価値とは何かについての美的認知主義のまとめが、美的認知に関連する「美的能力」の役割を無視していることを主張する。ビアズリー本人は、美的能力が多くの認知的性質を含むことを否定しているが、本発表では、美的能力は「理解」という認知的達成、すなわち芸術の認知的価値に分類できることを論じる。まず、美的認知主義による認知的価値についての説明をまとめたうえで、それと道徳的発達との関連性を示し、美的発達との関連の欠如を指摘する。次に、美的認知主義の議論に厚生と分配的正義の概念を取り入れ、芸術価値論が分配的正義を論じるべき理由を述べ、美的認知主義における分配の対象が何であることを明らかにする。そして、ビアズリーの美的能力に関する記述をもとに、美的認知主義の立場から、理解の一種としての美的能力が何を指すのかを説明する。このように、美的発達に関連する認知的価値を補足することで、芸術の認知的価値と美的価値の関係の説明はよりしやすくなる。